



# コロナのデマ 犯人はお前だ!

新型コロナウイルスの感染拡大の陰で、インターネット上には多くのコロナ関連のデマやフェイクニュースが飛び交い、社会を混乱させた。偽情報にどう対処するべきか。

## 「納豆が効果」「漂白剤飲む」偽情報次々

総務省が昨年5月に実施したネット利用者調査からは、多様な偽情報が広まり、信じられたことがわかる。

コロナ予防法では、「こまめに水を飲む」に効果があると信じたのは回答者の28.7%。「ニンニクを食べる」は14.8%、「納豆を食べる」が9.6%だ。「漂白剤を飲む」という危険なうそも3.1%が信じた。

東京都内の女性(63)も偽情報を信じた一人だ。昨年2月、親戚から無料通信アプリLINEのメッセージを受け取った。

「ウイルスは耐熱性がなく36、37度の温度で死滅します。多くのお湯を飲んでください」。女性は知人ら約15人に転送したが、直後にうそだと判明した。女性は取材に「つい信用してしまった」と悔

やむ。

英国では電波が感染拡大の原因とのフェイクニュースが出回り、通信設備が放火される事件が相次いだ。イランでは、燃料用アルコールを飲むと予防効果があるというデマを信じ、500人以上が中毒死たと報じられた。

## SNSがウソ拡散

ネット上の明らかな偽情報まで信じさせ、短期間で多くの人に拡散させた「主犯」は、SNSだろう。

SNSには、考えの似た者同士が集まりやすく、同じような情報に繰り返し触れやすい。検索履歴などから自分好みの情報ばかり届く作用もある。日頃から心地よい似た情報に慣らされ、情報を疑うことが減るようだ。



## 「まずは無視」最善

専門家は異口同音に、新聞・テレビなど複数の情報源に当たるようアドバイスしている。ただ、総務省調査では、情報の真偽が不明と知ったうえで、「興味深かった」(32.7%)、「他人に役立つ情報だと思った」(22.7%)などの理由で、偽情報を広めてしまったとの回答が目立った。情報共有が簡単なSNSの世界では、「おもしろそうな情報は、反射的に他人と共有する人」が多いようだ。

中央大の松田美佐教授(コミュニケーション論)は、「放置するのが一つの手。よかれと思って広めたとしても、偽情報なら免罪符にはならない」と指摘する。

ネットで情報源が不明の不確かな情報に出会ったら——。「まずは無視して放置しよう」。誰もが偽情報の「共犯」になりうるSNS時代。これを新しいネットのマナーとしてはどうだろうか。

(2021年1月11日 読売新聞朝刊より)

1 記事では「デマ」を多くの人に信じ込ませた「主犯」は何だと説明していますか。3文字で抜き出しましょう。

2 記事では日本で出回った「デマ」だけでなく、海外で信じられた「デマ」も紹介しています。これらを紹介するとどのような効果がありますか。最も適切なものを選び、番号で答えましょう。

- ① 日本人が「デマ」を信じやすい国民であることを知ってもらう効果がある。
- ② 危険な「デマ」を信じない日本人は、海外の人と比べて賢いということを知ってもらう効果がある。
- ③ 「デマ」を信じてしまうことは日本の国内だけの問題ではないことを知ってもらう効果がある。
- ④ 日本よりも海外の方が「デマ」が多いということを知ってもらう効果がある。

3 「誰もが偽情報の『共犯』になりうるSNS時代」とありますが、これはどういうことですか。説明として最も適切なものを選び、番号で答えましょう

- ① 不確かな情報でも、おもしろければ誰かと共有しようという人が多い時代。
- ② 多くの人が、SNSの情報を無視して放置する時代。
- ③ 日頃から心地よい似た情報に慣れており、自分の考えとは違う情報を疑う人が多い時代。
- ④ どんな危険な偽情報でも、すべて信じてしまう人が多い時代。